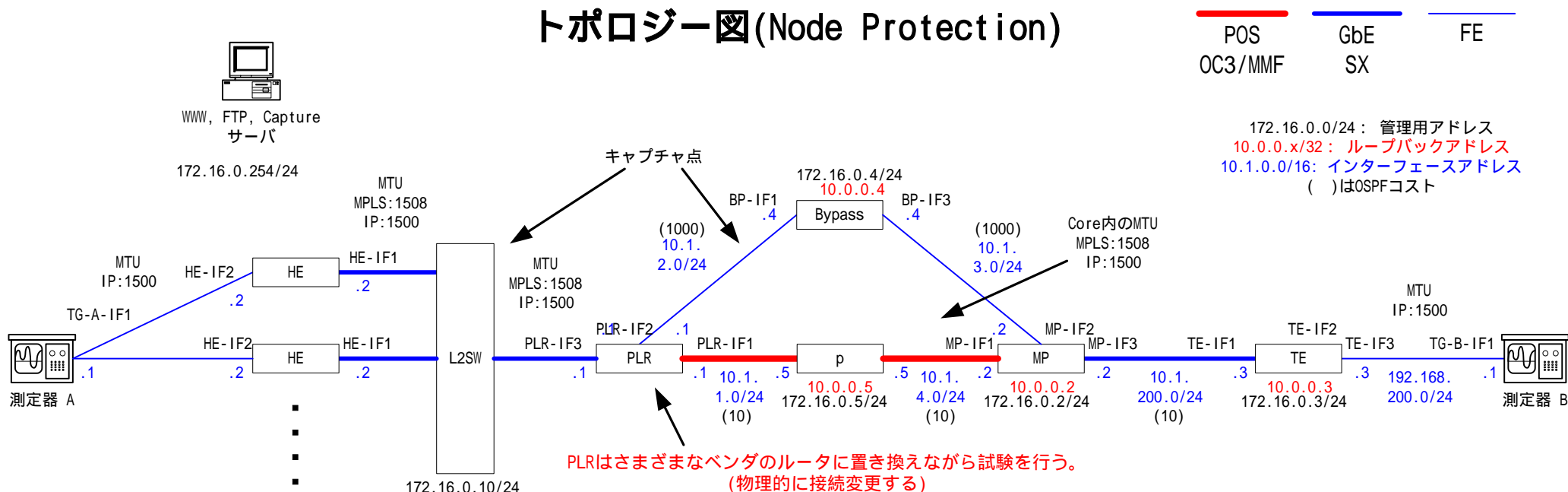


Ver.2 [2003/7/30]

# 次世代IX研究会 第7回ルータ相互接続試験 トポロジー図(Node Protection)



## 基本設定

- PLR、MP、Bypass、Pの管理ポートを除くすべてのインターフェースでTE拡張OSPF(CSPF)を起動する。プライマリ側のコストを10、バックアップ側のコストは1000とする。
- HE-IF1でTE拡張OSPF(CSPF)を起動する。HE-IF2ではOSPFを起動しないが、HE-IF2が接続しているネットワークの経路は内部経路(Router LSA)として広報する。
- TE-IF1でTE拡張OSPF(CSPF)を起動する。TE-IF2ではOSPFを起動しないが、TE-IF2が接続しているネットワークの経路は内部経路(Router LSA)として広報する。
- ループバックアドレスは内部経路(Router LSA)として広報する。
- OSPFのエリアは0とする。
- MTUは図に記した値を使用する。
- PLR-IF3は、802.1qを有効にし、HEごとにサブインターフェースを設定する。
- HEの各IPアドレス、PLRのループバック、管理用アドレスは別表を参照。
- HEのループバックアドレスからTEのループバックアドレスへRSVP-TEのLSPを確立する。192.168.200.0/24へのトラフィックは、このLSPに流すように設定する。
- LSPの名前は、「from\_A\_to\_te」とする。Aはベンダ名。
- プライマリパスはStrictに設定する。パスは以下の通り設定する。
  - (ア) PLR-IF3
  - (イ) P-IF1
  - (ウ) MP-IF1
  - (エ) TE-IF1
- バックアップのパスは以下の経路を通るように設定する。
  - (ア) PLR-IF3
  - (イ) BP-IF1
  - (ウ) TE-IF1
- 測定器Aから測定器Bへ1500バイトのIPパケットを1000ppsで送信し続ける。IPパケットには、DFビットをセットする。